「実存の三段階説」再考―実存の哲学的人間学のために

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

教科書の中のキルケゴール

哲学は大同無門で、どこから始めても何を議論しても良いと言えば、確かにその通りである。しかし、せっかく哲学を学ぶ以上は、人類の先輩たちが人間や世界をめぐる諸テーマを考えてきた歴史を踏まえておくことは最小限必要なことだろう。「自ら哲学する」にしても、人類の叡知を借りてこそ意味も重みも出てくるからである。哲学思想史の存在意義もそこにある。哲学思想史はいわば哲学の歴史的見取り図のようなものだ。

この見取り図においては、哲学者とその思想は歴史の中にマッピングされる。それは昆虫の標本作りにも似た、生きた思想のカタログ化でもある。哲学倫理学史の教科書とは通常そのように編まれており、そこではある程度の暗記もまた必要悪となる。

キルケゴールは、ニーチェと並んで 19 世紀における実存哲学の先駆者として登場する。彼のモットーは「主体性は真理である」とされ、また「実存の三段階説」が紹介される。この説によれば、人間の実存的あり方は、美的実存、倫理的実存、宗教的実存の三段階があり、反省が深まれば段階が向上していくという。実存哲学は 20 世紀にドイツではハイデガー、ヤスパース、フランスではサルトル、マルセルがそれぞれの仕方で結実させる。こういう定番の記述の中で、キルケゴールは実存主義者と分類される。

しかし、実はキルケゴールに限らず、どの哲学思想も哲学思想史の教科書的記述に収まるものではない。それゆえ、そこから思想を本来の姿に取り戻すためには、現代日本語訳でもよいからその原著書に当たっていく必要がある。原著書に実際に当たってこそ、思想は息を吹き返すことができるのである。

実存の三段階説再考

「実存の三段階説」は、『人生行路の諸段階』における記述などを踏まえてのものであるが、それ以上にこの本の書名の印象から来るところが大きい。『人生行路の諸段階』には確かに「三つの実存領域がある」として、それらは「美的領域、倫理的領域、宗教的領域である。（中略）美的領域は直接性の領域であり、倫理的領域は要請の領域であり……、宗教的領域は完成の領域である。」と記述されている。なるほど、実存には三段階あるように見える。また、『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』では、宗教的実存が内在的な宗教としての「宗教性 A」（人生への共感はあるが躓きはない）と本来のキリスト教である「宗教性 B」（信仰の殉難を求める逆説的宗教性）とに区別される。こう見れば、実存の「四段階」にもなってこよう。

しかし、実際にはキルケゴールは段階 Stadium というより、上述した領域のほか、人生観、範囲、規定、立場、範疇（カテゴリー）、階層という語のほうを使用しているし、このような仕方での実存の段階について言及したところも少ない。[(1)] いや、そもそも彼は「実存」という“哲学的用語”を生み出したわけではない。ただ、日常語として「生きる」とか「存在する」という意味の existere の名詞化された Existents という言葉を、人間のあり方に特化して用いて独自の意味を付与しただけなのである。実際、日本語訳では「生存」（白水社著作集［佐藤晃一訳］）とか「実存在」（創言社著作全集［大谷長監訳］）ともなっている。だから「三つの実存領域」があって……という教科書的記述も、「人間の三つの生き方」があって、それは美的な生き方、倫理的な生き方、宗教的な生き方であると平易に訳し直すことができるし、そのほうが「実存」と物々しい表現を用いるよりもすっきりとする。だが、20 世紀のいわゆる Existentialismus や existentialisme に繋げるためには Existents は「実存」であるべきであり、これらの言葉も「生き方主義」ではなく、哲学用語らしく「実存主義」と呼称しなくては重みが出てこないわけである。

逆説的弁証法としての位置づけ

もう一つ注意すべきは、「三段階説」という見方である。これは明らかに「正反合」のヘーゲル流弁証法（これまたいかにも教科書的な捉え方だ）をモデルにしながら、しかもこれとは全く異なる逆説的弁証法を駆使するキルケゴールにも適用している節が見られる。本来は全くその弁証法的あり方が異なるにもかかわらず、「三段階説」と言ってしまうと、「実存」が美的、倫理的、宗教的な段階へと、俗流弁証法よろしくホップ、ステップ、ジャンプとランキングが上がっていく印象を与えてしまう。文章が限られた教科書的記述では、どうしてもそのような理解の限界が生じる。

『人生行路の諸段階』、『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』はともに、白水社著作集ではそれぞれ三巻本、千ページ以上もある大著である。パラグラフの一片を切り貼りして紹介する方式は、キルケゴール自身が最も警戒していた理解のされ方ではなかったのか。ここは、やはりじっくりとそれぞれの本を読まなければならない。これらを丁寧に読めば、「三段階説」の扱い方も見えてくる。

三つの実存領域はそれぞれ問題をはらみながらも、きわめて実り豊かなものだ。その実り豊かさは文学的に語られることで、生き生きと読者に伝わってくる。キルケゴールは、アイロニーやユーモアという中間規定を用いて、読者の内に弁証法的な振動を引き起こそうとする。彼が仮名著者による文学形式を用いるのも、実はそこに理由がある。仮名著者もまた、それぞれの人生行路のカテゴリーなのである。

ミラン・クンデラは、文学作品における登場人物について、「人間をカテゴリーに分類することがそもそも可能であるならば、あれかこれかの全生涯に彼らを方向づける深い願いによってである」[(2)] と述べている。この科白をクンデラは自らの小説の中で挿話的に漏らしているが、これが最も端的に実存としての人間のあり方について示した言葉ではないだろうか。生身の人間が決してカテゴリーに分類できないのは、生きた思想がカタログ化できないのと同じことだ。読者には、これを自ら“解凍”して賦活し、自らの生き方や思想の中でこれを受け取り直（ゲンテーエルセ）すことが要求される。

人間とは精神として動的総合であり、それが人間の本来の姿である。享楽の隣には倦怠が控え、理性と懐疑は裏腹の関係にあり、信仰は絶望の深淵の中に掛かっている。人間は日々新たに自己の生を受け取り直（ゲンテーエルセ）すことで、はじめて人間すなわち精神として生きる。これが人生の逆説的弁証法の姿なのである。

［註］

(1) 小川圭治『主体と超越』創文社、1975 年、126 頁。

(2) ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』（千野栄一訳）集英社文庫、242 頁。